

萩藩絵図方の沿革(一)

井上武兵衛 有馬喜惣太

この両名といえは、いわずと知れた「地下上申」「地下上申絵図」^①「行程記」^②などの、いわゆる近世防長の歴史地理史料の基幹をなすもの作成にたずさわった、中心人物として知られている。

その彼らが属し、右に挙げたもの他、「寺社由来」^③「御国廻御行程記」^④など今に残る貴重な史料を作成したのが、まさにここにとりあげる藩府「絵図方」であった。

以上の諸史料については、山本正大、川村博忠氏らをはじめとする多くの優れた研究業績がある。が、これら一連の事業主体たる「絵図

萩藩絵図方の沿革(一) (山田)

山
田
稔



地下上申絵図 (吉敷郡吉田村清図)

方」そのものについて述べられたものは少ない。

加えて、「地下上申絵図」の再整理を課題とする自分としては、いわばそのカギを握っているともいえる「絵図方」の実態の解明について他ならぬ興味をいだかずにはいられない。

さらに、従来「定説」とされている

「地下上申絵図は多く喜惣太の手に成る」^⑤

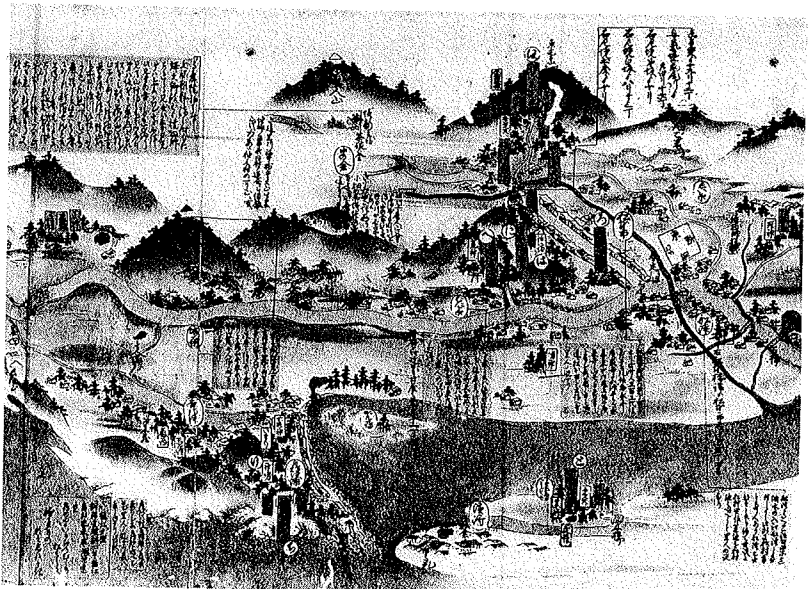
「御国廻御行程記の絵師は喜惣太」といったことなどにも再び目を向け、この角度からも「絵図方」を見直してみることとした。

—喜惣太のほかにも絵図作成にたずさわったものが必ずいるはずだ—そのスタッフはいかに?!

これらの解明をも加えながら、わずかでも萩藩の「絵図方」に迫ってみたいが、本稿では、まず絵図方の起源とその初期の沿革を探ってみることにしよう。

二

「もりのしげり」によると、絵図方の職務について、



四六

御国廻御行程記(萩周辺)

「屋敷図地図其他総テ絵図調製ノ役ナリ、此役ヨリ多ク高札方ヲ兼又明治元年十一月廿三日廢役、就職階級「七十石以下八組士」、役料は「毎年四石同銀二百五十目」となっている^⑥。しかし、その創始年・時代については記されていない。次に、「役人帳」^⑦で調べてみたところ、「絵図方」の主要スタッフについて以下のように示されていた。

- 兼重 和泉
 - 羽仁 下総
 - 厚母 四郎兵衛
 - 厚母 四郎兵衛
 - 厚母 四郎兵衛
 - 平田 仁左衛門 敦恒
 - 井上 武兵衛 親明
 - 平田 四郎左衛門 敦能
 - 平田 仁左衛門 敦則
 - 平田 四郎左衛門 敦□
- 正徳三巳二月朔日免
宝永五子八月廿九日 正徳三巳二月二日ヨリ本役
家業
享保五子十二月十八日 宝曆五亥三月八日免
明和七寅閏六月五日
- 仁左衛門嫡子
後弥 二兵衛

右仁左衛門及老年候付病氣支之節本役同様出勤被仰付候

これによると、初代の「絵図方」役人は、兼重和泉ということになるが、この兼重和泉について譜録で調べてみることにしよう。

萩藩絵図方の沿革(一) (山田)

四八

兼重和泉守元統—永祿三年(二五六〇) 芸州吉田生。元和六年(二六二〇) 没、享年六十一歳。慶長四年(二五九九) 和泉守を受領している。

この兼重の伝書の中に次のような記述がみられる。

一、元統有才覚故、防長両国御所務帳并御両国之絵図道程帳相調差上候

これについては年代が記されていないため、いつ頃の事績かわからない。記載状況(順序)からすると、天正年間とも推測されるが、これが何をさしているのか断定し得るものはない。

しかしながら、この兼重が何らかの形で防長両国の絵図等の作成にたずさわったことは明らかであり、兼重が慶長五年(一六〇〇)に蔵田就貞とともに防長両国の石高を検していることと考え合わせると、まさにこの時期の兼重和泉をもって実質的な「絵図方」のおこりと言えるのではなからうか。

とは言え、兼重がどのような役職にあつたかは定かではなく、彼の譜録中にも「絵図方」云云といった記述は見られないのである。

三

三人の厚母四郎兵衛のうち最初にあげられた四郎兵衛は、厚母四郎兵衛就房である。寛文六年(一六六六) 没、享年不明。頓野五郎右衛門就重の養子で、実父は積山与左衛門維道。その後、厚母四郎兵衛佐元知と兄弟の契りを結び、頓野を改め、厚母氏を称するようになった。

一、慶安五年正月十一日御両国絵図方被仰付御奉書被下之

一、年号不知八月十三日右御役中毎年御両国打廻り、上使御下向之節御國中御供仕旁苦勞仕候間、御意之旨被仰渡御奉書被下之

一、年号不知七月十一日上使御通被成候節、御道筋に被差出候付御奉書被下之

右はその伝書の抜粋である。ここに示されている通り、就房は慶安五年(一六五二)に「御両国絵図方」に任命されている。まさにここに役職としての「絵図方」が登場してくる。しかも、その名「御両国絵図方」が示す通り、時あたかも江戸幕府による国絵図(正保国絵図)徴収が行なわれたのであった。

正保国絵図(防長両国大絵図)は、周防・長門の二鋪一組で木箱に収められているが、その木箱の蓋裏に「入日記」として次のように記された貼紙がある。

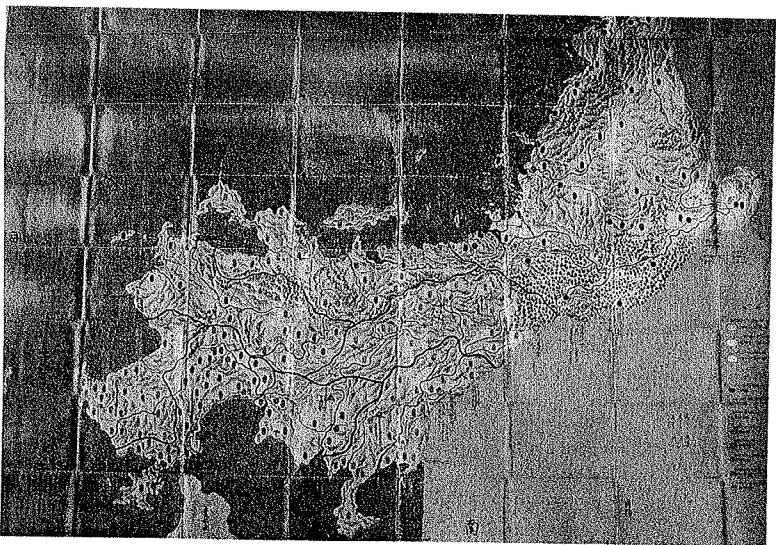
入日記

一、防長御両国之絵図 式枚

但、慶安式八月廿一日井上筑後守殿に同年十一月廿

日曾称源左衛門殿に被指上候御扣江木次郎右衛門調之

萩藩絵図方の沿革(一) (山田)



正保長門国絵図(335×480)

萩藩絵図方の沿革(一)(山田)

一、萩御居城之絵図 壹枚

但、慶安式八月廿一日公儀被指上候処不足之品有之如此調替、慶安五年六月十九日井上筑後守殿被差上候御扣厚母四郎兵衛調之

一、御両国石高帳 貳冊

但、慶安式十一月廿日曾祢源左衛門、同三五月廿一日井上筑後守殿被指上候御扣江木次郎右衛門調之

但、慶安式十一月廿日曾祢源左衛門殿、同三五月廿日井上筑後守

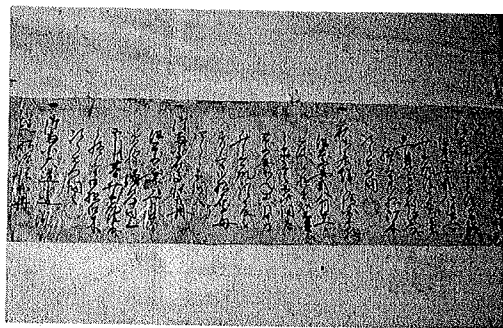
殿へ被差上候御扣右同人調之

文化八未之八月

この幕府による正保期国絵図徴収は、正保元年(一六四四)に諸大名に命じられている。ところが、右の史料からもわかるように、実際に萩藩がこの仕事を終えたのは、その八年後の慶安五年(一六五二)のことであった。

そして、就房がこの「御両国絵図方」を命ぜられたのは、まさしくその完成年の慶安五年のことである。

言いかえると、役職としての「絵図方」がスタートするのは、慶安五年、厚母四郎兵衛就房の「御両国絵図方」就任をもってということになる。



入 日 記

厚母四郎兵衛高五拾石御組に被相加候条可有其御心得候、御両国絵図方被仰付御國中廻申候条御定之辻持懸出銀御普請役可被差除候、恐々謹言
慶安五正月十七日

国 備後

益 越中

毛 右京

堅田安房守殿

右の奉書のとおり、就房は褒賞として五十石を与えられている。また、これから、就房(絵図方)が、両国絵図作成にあたり、防長両国を巡廻していたことがわかる。このことは、享保期以降にはじまる絵図方の一連の地誌編纂事業での動きとつながりをもっていると考えられるが、それは稿を改め詳しく述べることにしよう。

ところで、前出「入日記」の記述から、厚母とその仕事を分担していた人物として江木次郎右衛門があげられる。江木次郎右衛門元直(延宝元年(一六七三)没、享年八十九歳、この江木が国絵図作成の仕事にたずさわったことは、「尤御両国絵図羽仁信濃、二郎右衛門元直兩人二被仰付江戸に被召上信濃儀者先達而被差下候処元直壹人六ヶ年相詰」といった彼の譜録の記述からもわかるのであるが、さらにここに「羽仁信濃」なる人物が浮上してくる。

「役人帳」の二番目にあげられている羽仁下総については何もふれなかったと思う。一通り譜録を調べた限りでは、羽仁で「下総」を名乗ったことのあるものは見あたらない。

一方、羽仁信濃は、善左衛門を名乗っており、信濃が寛永国絵図調製に関係していたことは、岩国藩の記録「証記拔萃類聚」の一節からもうかがうことができるのであるが、両者の関係について確かめる手だてはなく、羽仁下総に

ついでには不明のままである。

さて、目を再び厚母へもどしてみよう。彼の譜録にはさらに次のように示されている。

為御意申入候、御方事久々絵図方ニ被付置、毎年御両国廻廻、上使御下向之節ハ御国中之御供旁辛勞之段内々以達御聞候、然者今度堅安房守遂披露重疊被聞召届候、弥心遣仕候様可申聞旨候間可被得其意候、委細堅安房守へ被仰渡候、恐々謹言

永々御役所勤苦勞仕を被思召候、已上

八月十三日

梶 兵庫 就幸判

厚母四郎兵衛殿

この奉書から読みとれることが二つある。一つは、前にも少しふれたが、「絵図方」役人としては、絵図作成のために防長両国の地理に精通しておく必要から、毎年のように両国内を踏査して廻ったことである。さらに今一つは、幕府上使の国内巡見の際にその案内役を務めたことである。「絵図方」はその「地理功者」なるをもつて、案内人の役目をも果たしていたと考えられる。

このことは、承応二年(一六五三)の幕府国目付来藩のときの御供役人の中に厚母四郎兵衛の名が見えることや、寛文七年(一六六七)の幕府巡見使来藩の際、就房の継子三左衛門について「絵図方厚母三左衛門御國中御供申付候条、御国境ニ御案内者衆被引合御意次第御駕籠跡先御供仕候様可被申聞候事」といった記録が残されていることから確認できよう。

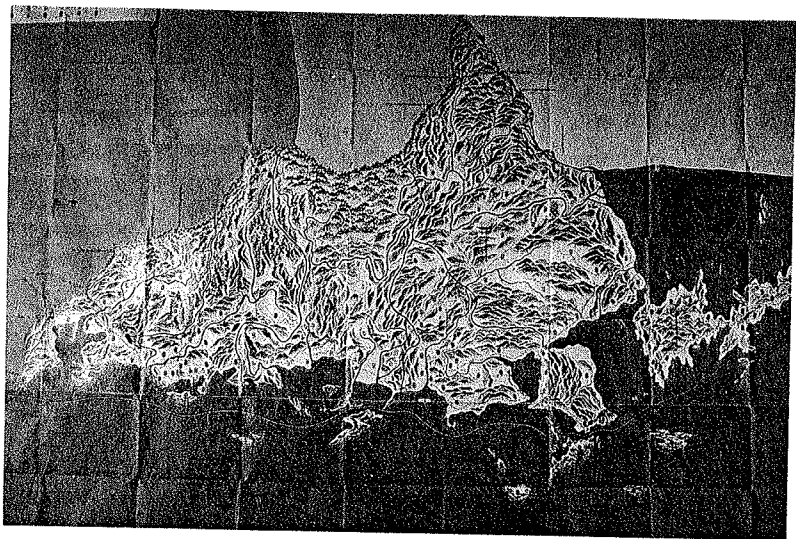
四

就房の死後、「絵図方」はその継子三左衛門^⑩・厚母四郎兵衛就種^⑪に受け継がれる。

この就種の役中の大事業としては幕府の元禄国絵図徴収^⑫があげられる。このことについては、「御両国絵図被差上覧^⑬」をはじめとする諸史料や研究書があるため、それらを参照されたいが、このとき就種に絵図作成補足として寺社組絵師津森小兵衛が協力していることは書き留めておくことにする。

就種の永年の絵図方勤務に対して以下の奉書が下されている。
厚母四郎兵衛事、親已来絵図方御役被仰付候処、御役筋別而心懸能御用ニ立候、就中殿様御国廻り并御国々之上使度々首尾能相勤、殊今度公儀ハ諸国一同ニ被差上候御両国御絵図之儀ニ付、去々年江戸被召上せ度々公儀絵図方御役人ハも出合結ひらき無残所メ頃日御絵図致出来公儀被差上首尾能納り申候、去々年已来別而苦勞仕ニ付而旁ニ被為対為御加増高式拾三石被為作拜領持かかり引合高百石ニ被成遣之

萩藩絵図方の沿革(一)(山田)



元禄周防国絵図 (400×612)

旨候間、此段可被申渡候、恐々謹言

元禄十二 五月廿二日

国 与三兵衛 印

毛 市正

清水長左衛門先祖証人

このうち、「就中殿様御国廻り并御国々之上使度々首尾能相勤」の部分から、絵図方が巡見上使の案内のみならず、いわゆる「御国廻り」―藩主の初入国後に行なわれた防長両国の国内巡見行事―の案内役をも勤めていたことがわかる。

このことも、四代吉広の御国廻りのとき、深川において御供役の褒賞として厚母四郎兵衛、三左衛門父子に小袖巻ツ宛が与えられていることなど、御国廻り関係の諸史料に散見することができる。

果して、就種は、永年の絵図方勤務の功績を認められ、高百石を与えられたのであった。

五

三代目「厚母四郎兵衛(房信)になると、それまで代々厚母家に引き継がれていた「絵図方」に変化が起きた。

厚母四郎兵衛

右平田仁左衛門事、絵図方御用筋為見習近年自分へ被付置候、此儀絵図方家業ニ被仰付候条、御用筋申伝弥御用ニ相立候様可仕候事

宝永五子ノ八月晦日

この史料が示す通り、平田仁左衛門が、絵図方見習として厚母へ付けられていたのである。しかも平田は絵図方を「家業」として仰せ付けられたのであった。これにより、以後「絵図方」は代々平田家に受け継がれていくこととなった。これも絵図方の専門性が重視されたためでもあろうか。

かかいう事態も、房信の譜録に「正徳三年六月二日絵図方御役如願被差替候」とあるように、房信が御役替を願い出たため、代わりに平田が選ばれたと考えられる。とは言え、残念ながら平田の譜録はすべて散逸しており、平田仁左衛門が、いかなる人物でどういう地位にあったものか知ることはできない。

ともかく、「絵図方」は厚母四郎兵衛房信のち、平田仁左衛門敦恒に引き継がれ、この平田の役中より、「地下上申」をはじめとする一連の地誌編纂事業の開始をみるようになるのである。まさに「絵図方」はその盛勢期をむかえようとしているのであった。

註① いずれも山口県文書館所蔵旧藩別置史料。

② 毛利家文庫・地誌41番。

③ 旧藩別置史料。

④ 毛利家文庫・地誌57番。

⑤ 吉田祥朔著「増補近世防長人名辞典」二八頁有馬喜三太の項。

⑥ 時山弥八著「もりのしげり」(昭和七年再版)旧長藩職役一覧表、三〇六頁。

萩藩絵図方の沿革(一)(山田)

⑦ 県史編纂所史料8番(5)「役人帳 十ノ下」。

⑧ 毛利家文庫・譜録か74番「兼重五郎兵衛貞連」。

⑨ 毛利家文庫・譜録あ64番「厚母与三房清」。

⑩ 毛利家文庫・絵図238番。

⑪ ⑨に同じ。

⑫ 毛利家文庫・譜録え5番「江木次郎右衛門真直」。

⑬ 毛利家文庫・譜録は4番「羽仁木工幸光」。

⑭ 岩国徴古館蔵。これについては川村博忠著「江戸幕府

萩藩絵図方の沿革(一)(山田)

撰国絵図の研究」(古今書院、昭59年) 48頁を参照。

⑮ 毛利家文庫・柳宮41番(40の37) 「両御目付衆様御国廻り二付御供之諸役者其外付立」。

⑯ 毛利家文庫・柳宮41番(40の1) 「目録〔並巡見使録〕寛文七」。

⑰ ⑨を参照。三左衛門は養子である。

⑱ 毛利家文庫・絵図246番「長門周防大絵図」。

⑲ 毛利家文庫・地誌31番。

⑳ 前出、川村博忠著「江戸幕府撰国絵図の研究」

⑳ 毛利家文庫・巡見事5番「御国廻事 元禄九」。

㉑ 毛利家文庫・諸省97番「雑事書拔」。

㉒ ⑨に同じ。